
とうのおひめさま

鍵屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とつのおひめさま

【Nコード】

N4866R

【作者名】

鍵屋

【あらすじ】

塔で暮らすお姫様の話。童話風に。

【注意！】当作品には潔癖症の方の場合気分を害するおそれのある設定があります。ええ、衛生的に。何がきても笑って流せるぜ、という方のみお願いします。この件での苦情は受け付けません。

王宮の一角に建てられたとてもとても高い塔。そのてっぺんではお姫様が暮らしておりました。

肌は穢れを知らない雪のように白く、髪は白というよりも白銀と表現するのが正しいような癖のないそれで、瞳は淡い灰色をしています。

けれど塔から一度も出たことのないそのお姫様。合つことが出来るのはこの国でひとり、国王陛下だけだといいます。

だからそのお姫様は、塔のお姫様と呼ばれているのです。

*

お姫様の一日は日の出と共に始まります。

「……………眠う」

大人が十人は寝ても余裕がありそうなほど大きな寝台でお姫様は眠っております。

お姫様のために特別に作られたというその寝台は極上の品で、短時間で十分な睡眠が取れると評判の品です。

「あー、今日も一日が始まりやがったか。こんちくしょう、もっとゆっくり昇りやがれ」

お姫様は昇り始めた太陽を見て太陽に挨拶すると、寝乱れた髪を手櫛で整えます。

「ちっ、また絡まりやがった。

あの変態の命令がなけりやとっと切ってやるのによ」

絹糸のような髪は手櫛だけで綺麗にまとまって行きます。

暫くそうしていたお姫様ですが、満足がいったのでしょうか、寝台から降りるとその白の夜着を脱ぎ衣装棚にかけてあったドレスに着替えました。

そのドレスもお姫様と同じ全てが白で統一されたそれで、お姫様の儚さを更に引き立てるものでした。

「スカートって嫌いなんだよな。」

素直にズボン寄せさせてんだよな。あー、ひらひらして邪魔くせえ」

ドレスの裾を整えるように払うと、お姫様は壁際に置かれたテーブルに置かれたベルを鳴らします。

涼やかな音がしたかと思うと、部屋の中央のテーブルに料理が並んでおりました。

「やっぱり白尽くしかよ。たまには違う色のメシを寄せよな」

テーブルに並べられた料理はお姫様の言ったとおり、白尽くしでした。

今朝の献立は焦げ目ひとつない白のパンに、牛乳でたくさん野菜を煮込んだ白いスープ。それからデミエと総称される白い葉と白い根菜で作られたサラダ、当然かかっているドレッシングも白です。お姫様が食べる食事は白いものだけだと、そう決まっているのです。

「ま、色を気にしなきゃ毎日お代わりしてえくらい美味いんだけどよ」

テーブルにつき、お姫様は食事前の祈りを捧げるとそれらに手を伸ばしました。

食事を終えたお姫様は、お役目を果たすために隣のお部屋へと移動されました。

寝室兼私室であるお部屋の隣にあるそのお部屋は、床に幾つもの魔法陣が描かれておりました。

「衣食住を保障してもらってる以上働くけどよ。ったく、気色悪い」
お姫様は床に描かれた魔法陣全てが問題なく輝いているのを確認すると、部屋の隅でおもむろにドレスに手をかけました。そして下穿きも脱ぎ捨てて生まれたそのままの姿となると、青い光を放つ小振りな魔法陣の中に入りました。
すると床からは細かい気泡を含んだ水が湧き出してお姫様を包み込みます。

水の中で静かに目を閉じるお姫様はとても幻想的で、そんなお姫様に惹かれたのか水の精が現れてお姫様と戯れます。

「懇切丁寧に磨きやがって。

肌が擦り切れるぞ、アホ水共」

魔法陣から出たお姫様は水の精たちにお礼を言うと、濡れて肌に張り付いた髪が厭わしいのか掻きあげ、それから隣の魔法陣にと向かいます。

青に赤、緑に黄色。それから白に紫にと、様々な色に輝くその魔法陣の中に入ると光があふれ出しました。光は柔らかにお姫様を包み込みます。

先ほどと同じように、どこからともなく現れた精霊たちがお姫様の周りを飛び交います。青の色の水の精、赤の色の火の精、緑の色の風の精、黄色の色の土の精、それから白の色の光の精に紫の色の闇の精。

この世界を構成するといわれる六種の精霊たちがお姫様の肌を撫でては、お姫様から得た輝く何かを床の魔法陣に落とします。

幾度そうしたことでしょう。

やっと精霊たちが去り、魔法陣の光が消えたときにはぐったりと疲れた様子のお姫様が座り込んでおりました。

「ヘタな運動よりカロリー消費すんだよな、これ。

あいつら必要以上に自分らの分までごっそり抜き取りやがって。こっちの身にもなれってんだ」

お役目が無事に終えたことの感謝を精霊たちにつげると、お姫様

はドレスをまとうために立ち上がったのでございました。

お役目の疲れを癒すように、お姫様は昼食をとったのちは長椅子で横になってお身体を休ませながら読書に励んでおられました。

「あー、くっただらね。」

この世界にも漫画があつて助かったわ、なけりゃこんなトコでどう時間を潰せばいいのかわかんねえもんな」

絵の描かれた書物のページを捲りながら、お姫様は時折その目に涙を浮かべながら感想を呟かれます。

実は異界から参られた当代の塔のお姫様。きつとご自分の世界を思い出されて郷愁の思いを抱いておられるのでしよう。

ぼろぼろと頬を伝うその涙はきらきらと輝き、結晶となつてころりと転がります。塔のお姫様の涙は、お姫様から離れた次の瞬間には結晶となるのです。

「……こんなものの何がいいんだか」

お姫様は自分の涙だったものを摘み見つめたあと、寄せ集めて長椅子脇の机の上にあるガラス瓶に流し込みます。からからと音を立て転がり落ちるそれは、なんとも表現し難い輝きを放っております。

けれどお姫様には、この涙だったものをなぜ人々が求めるのか、それが理解出来ませんでした。

その日の夕暮れ時、お姫様の元を国王陛下が訪れておりました。国王陛下はお姫様を見るなり、汚らしいものをみるかのようにその目を細められたのです。

「どつという格好をしている。」

俺はお前に十分な衣服を用意させていると思っていたが」

当代の国王陛下が当代の塔のお姫様に向ける言葉は、それはそれは辛辣なものにございました。

「あー、うん。まあ、数だけは十分だよな。俺ここで暮らし始めてひと月以上になるけど未だに同じの着た覚えねえし。」

「だけど俺が着たいって言うてるズボンもんがねえってどういうことだよ。新しいの追加するならズボンを入れろ、ズボンを！」

「塔の姫の衣服は代々ドレスと決まっている」

「はっ、どうせ限られたもんしか見ねえんだ。どんな格好してよおが構わねえじゃねえか」

「だからといって、下穿きのみとはどういう見だ」

お姫様は国王陛下の視線に耐えられなくなつたのか、視線を逸らすと俯かれました。結わえていない髪がさらりと落ち、お姫様の顔を隠します。

「それは……だな、深い事情があつてさ」

「俺が夕餉と一緒にとるために来るとわかつていながら、下穿き姿で待つにたる深い事情がか。」

素直に吐けば夕餉後まで我慢してやらんこともない。もつとも、素直に話す気になつた時にその気力があればだがな」

「なっ！ てめっ、それは横暴だ！」

間を詰めた国王陛下の様子にお姫様はその白い顔を蒼白かんはせに変え、逃れるために後退りました。けれど国王陛下の手はいとも簡単にお姫様の腕を捕らえ、その華奢な身体を己の腕の中へと収めたのです。

「横暴？ どの口がそれを言うか」

「顔が近いっ！ 近いってば！」

「ならば俺が食らう前にその事情とやらを話すか、我が？ 糖？ の姫」
「それは……」

なんとか逃れようとお姫様は身を振りますが、国王陛下の束縛が緩むことはありません。

助けを求めるようにお姫様の視線が宙を彷徨いますが、それに応

える者はこの場におりません。この部屋に入ることが許される外の者は、国王陛下ただ御ひとりなのですから。

国王陛下の頭が下がり、その唇がお姫様の唇を捕らえます。

「……んっ」

お姫様から漏れる甘い声。

嗚呼、なんと目の保養となる光景でしょうか。今にもはかなく壊れてしまいそうな女性を力づくで組敷く殿方。しかも無理矢理、強引に！ もだえるのを我慢するので精一杯にございます。

……つと。わたくしとしたことが。つい感情のままに筆を走らせてしまいました。

国王陛下の唇がお姫様の唇から離れ、お姫様は酸素を求めるように肩で息をされます。蒼白であった顔や、下穿きに隠されていない肌が赤く染まります。

「どこもかしこも甘いな、お前は」

「こつちは甘ったるくて気分が悪くなるんだって！

砂糖なら毎日作ってるし、望むなら涙でも血でもなんでも出すから。頼むからキスだけはやめてくれっ！」

お姫様の口から発せられた拒絶の言葉に、国王陛下の表情が険しいものになりました。

「慣れる。お前の内から零れ落ちるものが最も甘美で、俺の口にあっている。」

それがあれば血などいらぬ」

国王陛下はお姫様を抱えあげると、その身を寝台の上にと寝かせました。きつと、お姫様は文字通り国王陛下に？食べられて？しまうのでしょうか。

「エルザ、厨房に食事を遅らせるように伝えておけ。」

それから呼ぶまで入室を禁じる」

「かしこまりました、国王陛下。姫様、御前を失礼いたします」

蕩けそうなほど甘い顔をして国王陛下に組み敷かれる我が主に深

く頭をさげ、さすがのわたくしもここから先を出歯亀するつもりもなく、大人しく退室いたのでございます。

*

全ての始まりは、正確な記録も残っていない昔々のこと。

この国の民は総じて甘いものが好物ですが、国王陛下はその比などではなく、それはそれは好いていたそうです。

国民から好かれていた国王陛下のために、民たちは自分たちの甘いものを控えてまで国王陛下に献上したといえます。

それはそれは歓んだといえます。

けれど自分のために甘いものを控える国民たちに、国王陛下は悩みました。確かに甘いものを好いてはおりましたが、それ以上に自分を慕ってくれる国民を好いていたのです。

そして甘いものを控えた国王陛下。

最初は口にせずとも平気でしたが次第に甘いものを欲するようになり、それでも甘いものが欲しいとは気丈にもひと言もおっしゃらない国王陛下。

その姿に人々は甘いものをとすすめるのですが、首を横に振るばかり。

それを哀れに思った神様が使わしたのが、ひとりのお姫様。髪も瞳も、その全てが砂糖のように白く輝く美しいお姫様。

そのお姫様は、糖のお姫様。その身体全てが極上の甘露で出来ているかのように甘く、その涙も汗も血も、お姫様から離れた途端結晶化してしまうのです。

お姫様は言いました。

王宮の一角に私のための塔を建てる許可をください。そこで貴方

のために甘露を生み出し続けましょう、と。

国王陛下が頷くと、精霊たちが集まりお姫様のための塔を一瞬にして作り上げたのです。

お姫様は呆然とする国王陛下に口付けをし、精霊の光に包まれて塔の中に。その口付けは、どんな甘露よりも甘かったと、後に国王陛下は語ったといいます。

そして塔のお姫様と呼ばれるようになった糖のお姫様。

お姫様はただひとりのために、毎日その身を精霊に託し甘露を生み出し続けます。そして甘く甘く、国王陛下はお姫様に毎日愛の言葉を囁き続けるのです。

（後書き）

なぜかこうなった、シリーズ？です。

気が付けば「俺っ娘砂糖少女と寡黙系俺様陛下の甘ったるい日常を、出歯亀侍女が嬉々として記録する」という謎な作品に。色々と間違った気がしてなりません。

気にしちゃいけないのが、あらすじに書いた「衛生的にNG」。涙も汗も血も、お姫様から離れると砂糖になります。つまりアレとかアレとかアレとかも砂糖になる……のかも？

詳しく設定を考えたわけじゃないので、その辺りは好きな設定を脳内で補完しておいてください。

あと、当代のお姫様は異世界トリップしちゃった甘いもの嫌いな元女子高生。きつと男兄弟の中でそだったんでしよう。たぶん家はお菓子屋だったんでしよう。そして、引きこもり！

ネットがないのは残念がってますが、三度の飯よりも好物だという漫画があるので満足してるようです。某少年向けの海賊漫画の続きが読めなかったりするのはいさな不満のようですが。

長々と織り込めなかったネタを書きましたが、これにて。

2011.3.9

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4866r/>

とうのおひめさま

2011年6月25日12時55分発行